

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

我なり

――マルコ伝第14章43～73節――

1965年6月27日

小池辰雄

霊的傲慢と卑劣漢 忠誠 彼岸の人 活ける宮 我なり 我はそれなり 自己否定 原因であり目的 贖われたる我 与えられたる新しき我 我らを見よ

【マルコ14・43～73】

43 なお語り給うほどに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき来る、祭司長・学者・長老らより遣わされたる群衆、剣と棒とを持ちて之に伴う。44 イエスを売るもの、預め合図を示して言う『わが接吻する者はそれなり、之を捕らえて確と引きゆけ』45 斯て来りて直ちに御許に往き『ラビ』と言いて接吻したれば、46 人々イエスに手をかけて捕らう。47 傍らに立つ者のひとり、剣を抜き、大祭司の僕を撃ちて、耳を切り落とせり。48 イエス人々に対して言い給う『なんじら強盗にむかう如く剣と棒とを持ち、我を捕らえんと出で来るか。49 我は日々なんじらと偕に宮にありて教えたりしに、我を執らえざりき、然れど是は聖書の言の成就せん為なり』50 其のとき弟子みなイエスを棄てて逃げ去る。

51 ある若者、素肌あまに亞麻布まとを纏まといて、イエスに従いたりしに、人々これを捕らえければ、52 亞麻布まとを棄て裸はだかにて逃げ去れり。

53 人々イエスを大祭司の許もとに曳ひき往きたれば、祭司長・長老・学者ら皆あつまる。54 ペテロ遠く離れてイエスに従い、大祭司の中庭まで入り、下役どもと共に坐して火に煖あたまりいたり。55 さて祭司長ら及び全議會、イエスを死に定めんとて、証拠を求むれども得ず。56 夫それはイエスに対して偽証する者、多くあれども其の証拠あわざりしなり。57 遂に或者ども起たちて偽証して言う、58 『われら此の人の「われは手にて造りたる此の宮を毀こち、手にて造らぬ他の宮を三日にて建つべし」と云えるを聞けり』59 然れど尚なおこの証拠もあわざりき。60 爰こゝに大祭司、中に立ちイエスに問いて言う『なんじ何をも答えぬか、此の人々の立つる証拠は如何に』61 然れどイエス黙もだして何をも答え給わず。大祭司ふたたび問いて言う『なんじは頌ほむべきものの子なるか』62 イエス言い給う『われは夫それなり、汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲の中にあ



りて来るを見ん』⁶³此のとき大祭司おのが衣を裂きて言う『なんぞ他に証人を求めん。⁶⁴なんじら此の瀆言を聞けり、如何に思ふか』かれら挙りてイエスを死に当たるべきものと定む。⁶⁵而して或者どもはイエスに唾し、又その顔を蔽い、拳にて搏ちなど為始めて言う、『預言せよ』下役どもイエスを受け、手掌にてうてり。

⁶⁶ペテロ下にて中庭におりしに、大祭司の婢女の一人きたりて、⁶⁷ペテロの火に煖まりおるを見、これに目を注めて『なんじも、かのナザレ人イエスと偕に居たり』と言う。⁶⁸ペテロ肯わずして『われは汝の言うことを知らず、又その意をも悟らず』と言って庭口に出でたり。⁶⁹婢女かれを見て、また傍らに立つ者どもに『この人は、かの党与なり』と言ひ出でしに、⁷⁰ペテロ重ねて肯わず。暫くしてまた傍らに立つ者どもペテロに言う『なんじは慥に、かの党与なり、汝もガリラヤ人なり』⁷¹此の時ペテロ盟い、かつ誓いて『われは汝らの言う其の人を知らず』と言ひ出づ。⁷²その折しも、また鶏鳴きぬ。ペテロ『にわとり二度なく前に、なんじ二度われを否まん』とイエスの言ひ給ひし御言を思いだし、思い反して泣きたり。

● 靈的傲慢と卑劣漢

⁴³なお語りに給うほどに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき来る、祭司長・学者・長老らより遣わされたる群衆、剣と棒とを持ちて之に伴う。⁴⁴イエスを売るもの、預め合図を示して言う『わが接吻する者はそれなり、之を捕らえて確と引きゆけ』⁴⁵斯て来りて直ちに御許に往き『ラビ』と言ひて接吻したれば、⁴⁶人々イエスに手をかけて捕らう。⁴⁷傍らに立つ者のひとり、剣を抜き、大祭司の僕を撃ちて、耳を切り落とせり。⁴⁸イエス人々に対して言ひ給う『なんじら強盗にむかう如く剣と棒とを持ち、我を捕らえんと出で来るか。⁴⁹我は日々なんじらと偕に宮にありて教えたりしに、我を執らえざりき、然れど是は聖書の言の成就せん為なり』⁵⁰其のとき弟子みなイエスを棄てて逃げ去る。

ユダというのは弟子の中でも優れた弟子であつたと思われまふ。そのことはいろいろな本に書いてある。他の弟子たちも、よもやユダがイエスを裏切ろうとは思わなかつたらしい。ところが、ちょうど、天使の中でもサタンになつたのは天使の首であつた。それが

「神の如く」

といって、傍若無神に自分が神にのしあがろうとした。神に争おうとした。ここにサタン的精神というものがある。靈的傲慢というやつ。このユダにこのような靈的な傲慢な気持ちがさして、ついにキリストを売るようなことになる。



霊的な傲慢というものが最大の罪であつて、ダンテも地獄の中でこのサタンをどん底に置いている。そしてまた、主を裏切る者、国を売る者、そういった連中が地獄の一番どん底にやられる。そういう事態がここに残念ながら起きた。イエスはそのことを既に洞察しておられる。しかも、いかにも親しげにキリストに接吻するほどの動作をして、それが裏切りの合図であるというんですから、実に言語道断なことです。偽りもはなはだしきものである。ところが、

⁵⁰ 其のとき弟子みなイエスを棄てて逃げ去る。

と。普段、信頼していた、親しいと思つていた弟子たちがみんな逃げ去つてしまった。マルコ伝記者がもしマルコとするならば、マルコ自身も逃げ去つてしまった。イエスの懷に、胸に寄るといつていたヨハネも、またその例外ではない。まことに情けないことですが。霊的傲慢と、今度は卑劣漢ということ。しかしながら、そういった要素が我々罪びとの中に何%かはあるというのが、実に情けない生まれつきの人間の姿である。

● 忠誠

けれども、日本の歴史を顧みると、赤穂義士のごときは正に主君に対する忠誠を死をもつてこれを全うした。内村鑑三先生が、

「福音は、武士道に接ぎ木されるときに、最もそれが健全に日本的な福音として展開する」

ということを強調されています。日本は武士道という、士道という、きむらいの道です。もちろん、封建的な枠の中には、いわゆる義理にからまれて、実に何ともいえない暗黒の面があるけれども、しかしまた、忠誠という側のひとつの大事な面は、これはやはり日本人として大いに過去の善きものは評価しなければならぬ。

ものを見るときには、その中のどういう面において間違ひがあり、どういうところに本来に大事なものがあつかうということを冷静に見る目を持たなくてはいかん。聖霊というのは、知恵聡明の霊であつて、そういうものを両刃の剣で突き分けて、正しいものは正しいものとし、善きものは善きものとし、美しきものは美しきものとする。パウロがそういう使徒でした。

「およそ、そういうものを尊べ」

とパウロが言っています。パウロという人は実に素晴らしい幅を持った使徒です。何という使徒かと思ひます。その深さ、幅の広さ、高さ。これはみなキリストから来ているんですけれども。私たちは、御霊と言うならば、御霊はまた聡明の霊であるということを忘れてはいかん。

そういった忠誠です。

「七生報国」



という、楠木正成の言葉もありますが。この「忠」というのは正に、心(信)を貫くことな
んです。信実一貫という。

「たとえ法然にすかされても」

と親鸞が言いました。親鸞の信仰が正にまたそれである。

「たとえ地獄に落ちてても」

という。それは幸福主義とは全然反対であつて、法を尊ぶ。仏法を、また仏道を。

「我は道なり」

という、キリストという道を道するのである。

それが、弟子たちはみな落第してしまった。赤穂義士というような、また弁慶というよ
うな存在がいつまでも日本人の心を打っているのはやはり、人間の一番中心の、この信義
の世界です。これが我々日本人を打つわけです。私は、とにかくいわゆるクリスチャンよ
りも、日本人らしい日本人でありたいと思います。

人々は、私たちの福音の――構造といいますか、幅といいますか、質といいますか――
それを知らないから、いろいろ躓いているようですけれども。皆さんはどうか、

「父の全き」
まった

というその「全き」というものはどのようなことであるか、ということを生涯をかけて限
りなく身につけていかれるように。なんと、福音の世界は素晴らしいかな、どこに間違い
があるか、というような本当に凄い生命力と、また聡明な本当の光と、もの凄い幅をもつ
た知恵と、それから、一番大事なのは、一切を生命づけるところの愛です。

今、司会者がローマ書12章を読まれたましたが、本当にパウロという人は何という素晴ら
しい実存をそこに告白しているかなと思う。ローマ書12章のごとき、こういった精神があ
る限り、福音は絶対に滅びません。どこからつつ突いても、これに非難するところがある
かという。正に、聖霊の知恵の、また愛の、光の告白である。決して、いわゆる単なる徳
目をあげているのでも何でもありません。

●彼岸の人

ところが、彼らが躓いたのは、言うまでもなく、彼らとキリストとの間にどうしても渡
ることのできない大きな溝があるからです。キリストは彼岸の人である。弟子たちは此岸
の人である。

「みんな私に躓くよ」

と、その前にキリストは預言しておられた。

51ある若者、素肌あまに亞麻布まを纏まといて、

おそらく、この「ある若者」というのがマルコではないかと言われている。

イエスに従いたりしに、人々これを捕らえければ、52亞麻布を棄て裸はだかにて逃



げ去れり。

「私はこんなにして逃げてしまったんだよ」

と、もしこれがマルコなら、そういうことです。

「どんなことがあっても、死んでも、私はあなたに従って行きます」

と、力んで言ったペテロが、その次に出てくるような始末です。

53 人々イエスを大祭司の許に曳き往きたれば、祭司長・長老・学者ら皆あつまる。54 ペテロ遠く離れてイエスに従い、

もう既に遠く離れているわけです。

大祭司の中庭まで入り、下役どもと共に坐して火に煖まりいたり。55 さて祭司長ら及び全議会、イエスを死に定めんとて、証拠を求むれども得ず。56 夫

はイエスに対して偽証する者、多くあれども其の証拠あわざりしなり。57 遂に或者ども起ちて偽証して言う、58 『われら此の人の「われは手にて造りたる此の宮を毀ち、手にて造らぬ他の宮を三日にて建つべし」と云えるを聞けり』

ヨハネ伝2章です。これは注目すべき言葉です。キリストでなければ、こんなことは言わん。17節あたりから。これは宮清めのところですね。

「17 弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食わん』と録されたるを憶い出せり。18 ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』19 答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん』20 ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうちに之を起すか』21 これはイエス己が體の宮をさして言い給えるなり。』（ヨハネ2・17、21）

全然、問答がちぐはぐです。イエスは、おもしろいですね、なぞのようなことをおっしゃって、あとは知らん顔している。説明はなさらない。

「聞く耳あるものは聞くべし」

だ。マタイ伝では26章に書いてある。

「60 多くの偽証者いでたれども得ず。後に二人の者いでて言う、61『この人は「われ神の宮を毀ち三日にて建つべし」と云えり』62 大祭司たちてイエスに言う『この人々が汝に対して立つる証拠に何をも答えぬか』63 されどイエス黙し居給いたれば、大祭司いう『われ汝に命ず、活ける神に誓いて我らに告げよ、汝はキリスト、神の子なるか』64 イエス言い給う『なんじの言える如し。かつ我なんじらに告ぐ、今より後、なんじら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲に乗りて来るを見ん』（マタイ26・60、64）

「自分は、十字架を、苦難を受けて三日目に甦る」

ということを弟子たちに、特に親しい弟子たちに幾回か語っておられる。「三日目」という



のが、キリストはちゃんともうそれを見て知っておられる。金曜の午後3時に十字架において息絶える。その次に、金曜の夕方から土曜になるから、それから、土曜の夕方までが一日。土曜の夕方から今度は、我々でいうところの日曜に入っていくわけです。だから、ちょうど三日目になる。三日目の朝に甦られるわけです。なんと不思議な人でしょね。十字架に付いて三日目の朝に甦るということを、ちゃんともう予言しておられる。とても、それは考えられないことです。時間も空間も、場所も支配している人です。

●活ける宮

46年かかった大神殿を見て、何を驚嘆しているかと。一番驚嘆すべきものは、活ける宮であるということです。ヨーロッパへ行くと、実に大きな寺院がある。芸術的には、私も素晴らしいと思うけれども、ひとたび信仰の世界に立ち入ってこれを見るときに、おやおやと思う。ここで宗教的雰囲気浸ることがキリストの宗教かと。

我々は正直、どこへ行きましたが、ありがたいうちに、このイエスが、御霊のイエスが宿つていれば、世界中いずこに行きましても心安しということです。

「神の国」

というのは

「神の支配するところ」

ということ。即ち、神に在って、キリストに在って支配するところのものに自分がおかれている。どこへ行っても、みなそれぞれの所で、樂に証し人となっていられる。何も心配いらん。いたるところが故里です。

「われは手にて造りたる此の宮をこぼ毀ち、手にて造らぬ他の宮を三日にて建つべし」

とは痛快な言葉ですね。

「三日目に私は活ける宮となって立ち上がってくるぞ」

と。何という勝利の人でしょうね。これほどの勝利の人は、いまだかつてない。大勝利なんて言ったって、イエス・キリストは桁違いの勝利です。どんな英雄がいたって、ナポレオンもシーザーもかなわない。ナポレオンもセントヘレナで、

「ナザレのイエスはやはり勝った」

と告白した。

神の国は必ずきたる。イエス・キリストのこの勝利が、永遠の生命をもって現じてきたところのキリストの勝利なんです。天界に昇天し、霊界で神の右に在り給うところのこのキリストなんです。深い祈りの世界では、まばゆくて見えないキリスト。我々の主というのは、そのような素晴らしいかたである。クリスチャンはこの勝利者に結びついて、どうして、くすぶっていられるかというわけです。



59 然れど尚^{なお}この証拠もあわざりき。60 爰^{ここ}に大祭司、中に立ちイエスに問いて言う『なんじ何をも答えぬか、此の人々の立つる証拠は如何^{いか}に』61 然れどイエス黙^{もだ}して何をも答え給わず。

一番大事な問に対してだけ答える。第二義、第三義のことなんかはどうでもいい。一番大事な問に対して、ズバリ答えられる。それに答えれば、もう十字架です。十字架の答です。それはゲッセマネの祈りで、キリストははつきりとそのことを受けとられたから。

●我なり

大祭司ふたたび問いて言う『なんじは頌^ほむべきものの子なるか』

キリストであるか、メシヤであるかと。

62 イエス言い給う『われは夫^{それ}なり、

「エゴ エイミ」

というギリシャ語です。イエスはアラミ語で、おそらく一字です。ただ

「われ」

という一字。「それなり」も何もありはしない。

「我なり」

と。おそらく、キリストの言葉では、「われ」という字だけです。たった一語をもつて、

「われだ」

と言う。

「私がメシヤだ」

と。十字架につくこの私がメシヤだと。それで民衆も弟子たちも全部、そのことに躓いて
いるわけです。また、それによつて躓いてしまふ。

ところが、イエスは、ダニエル書の

「人の子」

という言葉と――あれは「メシヤ」ということ――イザヤ書53章の

「すべての人のために己を砕いてその罪を担う、贖う」

ということを。ヒタリ結びつけて受けとっておられるわけです。旧約聖書の一切を彼自身が
受けとつて、旧約聖書を破つてしまつてゐる。これは破棄して成就するんです。

「律法を満たす」

というけれども、律法を破棄して、成就するんですよ、キリストの成就というのは。ただも
つたいぶつてゐるのではない。もの凄い激しいものです。そんなものはいらんと。乱暴に
言えば、

「旧約聖書はいらん。私の中に全部それが新しい意味でもつてつかまえてゐる。
ユダヤ人のつかまえているような旧約聖書ではないぞ」



と。その奥が読めていない。その奥を開示する。モーセの十誡の奥を語っているのが、キリストの山上の垂訓です。なにさま、次元の違ったものが現れてきた。絶対次元です。二次元の、三次元のなんて言っている世界ではない。これは絶対次元です。絶対次元の世界がここに開示されてきた。

「我はそれなり」

「我なり」

というこの一言をもって、私たちはこの年の前半期の集会を終わることを私は不思議に思う。全聖書はこの福音書に焦点を結んでいます。また、福音書の中で、今日のこの「我なり」というこのキリストの言葉は、その最も中心の激しい言葉です。二義、三義、四義のことには答えないで、第一義のことだけにキリストは「我なり」と答えた。

「我はメシヤである。我はキリストである」

と。今でこそ、

「キリスト・イエス」

と言って、私たちは常識のように言うけれども、この時にイエスが叫ばれたこの一言は、驚天動地の言葉である。これが決定的な言葉です。ペテロも、

「汝は神の子、キリストなり」

と言って、カイザリヤ・ピリポの道で告白はしたようなものの、ペテロはまだその時に一時的なひらめきで言っただけの話で、本当にはわたの底からペテロだって受けとっていないわけです。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロが本当に

「主よ、キリストよ」

と叫ぶことのできるようになったのは、何としても聖霊のバプテスマを受けてからの話であって、それまでは絶対にこれが言えない。

クリスチャンも、キリスト教に入って、あるいは教会で洗礼を受けて、

「主よ、主よ。キリストよ」

とやってますよ。私だって、無教会で何10年かやってきた。偽りではない。みな結構です。けれども、本当に

「わが主よ、わがキリストよ」

と言って、もうそれでなければどうにもならん、キリストでなければと。

「主さま、あなたでなければ、私はどうにもなりません」

という、このどうにもならないただ一人の相手というものを本当に告白できて、そして、

「もう何がどうなってもよろしい」

というような魂になるのは、これは聖霊のバプテスマを受けなければ、そうならない。

人間は、いろいろなことがありますよ、お互いさま躓いたり転んだり。けれども、そのいろいろなガタガタでございますけれども、それがいつも事態を乗り越えて、そして、本



当に

「この主だから」

と言って、お互いに本当に信じぬき、愛しぬき、赦しぬいて進むという、この力は、本当に御霊をもつてキリストを告白する人でなければできない。また、その間ならば大丈夫です。ただ「十字架」と言つてたつてダメです。無教会は、それは十字架だから、ある程度はいいんです。危機をその十字架で突破しています。けれども、やはりどこかまだつつかえている。そのつつかえたようなものがなくなるということ——これはたとえあつたつてそんなものは問題でないという、突き抜けというものがあるということは——それはこの聖霊の世界に來たクリスチャンでなければ、

「そうだ」

と互いに言えない。私たちはお互いのあいだに、何かそういうわだかまりがあるなら、それははいかん。

「何だね？」

と——第三者をとおす必要はない。第三者を通すことはいらん——お互いさま本当に胸襟をわつて、

「どうしたんだい？」

というわけで、一対一の関係で話し合つたらいい。必ずこの福音の世界ならば、お互いに突破していくはずです。人間的なものでもし第一に立つたら、お互いにダメになる。

主が立ち給うところには、どのようなマイナスも、どんな経験も全部プラスに、もの凄いいプラスに変えられていく。それだけ積極的な——人生観ではない——人生道である。どうか、皆さん、この福音を受けたらば、この証し人にならなかつたらつまらんですよ、信仰なんて言つたつて。

「とにかく知らんが、私の中には、月々歳々、もう何とも言えない推進力がやつてきました」

という一人びとりに、皆さんがなつてくださらなくては。そうでしょ。

●我はそれなり

「我はそれなり」と、キリストは即ち、

「キリスト、メシヤである」

と言つて告白された。

汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲の中にありて来るを見ん」

まだ、そのことは、「再臨」は実現しません。けれども、再臨とは別なかたちで実現してしまつた。それは既にヨハネ伝で約束されているところの「約束の霊」が雲を貫いて、天を裂いて、風の如く火の如くに臨んできた。



63 此のとき大祭司おのが衣を裂きて言う

これは旧約にもよく出てくる表現です、悔改めや悲しみのときに。

『なんぞ他に証人を求めん。64 なんじら此の瀆言を聞けり、如何に思うか』

キリストは

「人の罪を赦す」

と言われたが、

「神さまのほかに罪を赦すものはない」

と彼らユダヤ人は思っているわけです。

「これは、自分はメシヤであると称える」

と――しかし、その頃、偽預言者がちよこちよこ現れているから、キリストがマルコ伝13章でおっしゃったように、

「偽キリストが出てくるから気をつけろ」

というようなことを言われた――

「この瀆言を直接に聞いたから、もう証人はいらん」

と。

かれら挙りてイエスを死に当たるべきものと定む。65 而して或者どもはイエスに唾し、又その顔を蔽い、拳にて搏ちなど為始めて言う、『預言せよ』下役どもイエスを受け、手掌にてうてり。

「誰が打ったか預言してみろ」

なんてなわけです。占いにそういうのがいるよね。財布の中にどれくらいのお金があるだとか、その人が何という名前か、見ないで言うとか。そういう占い人とキリストは違う。まじわざ、占いはいかんと、旧約聖書にも書いてある。

66 ペテロ下にて中庭におりしに、大祭司の婢女の一人きたりて、67 ペテロの火に煖まりおるを見、これに目を注めて『なんじも、かのナザレ人イエスと偕に居たり』と言う。68 ペテロ肯わずして『われは汝の言うことを知らず、又その意をも悟らず』と言って庭口に出でたり。69 婢女かれを見て、また傍らに立つ者どもに『この人は、かの党与なり』と言い出でしに、70 ペテロ重ねて肯わず。暫くしてまた傍らに立つ者どもペテロに言う『なんじは慥に、かの党与なり、汝もガリラヤ人なり』71 此の時ペテロ盟い、かつ誓いて『われは汝らの言う其の人を知らず』と言い出づ。72 その折しも、また鶏鳴きぬ。ペテロ『にわとり二度なく前に、なんじ二度われを否まん』とイエスの言い給いし御言を思いだし、思い反して泣きたり。

「そういうことになるよ」

と、キリストはもう予言して、ペテロに、



「三回私を否む、そうしたら、鶏が二度目に鳴くぞ」と言われた。何という不思議な人でしょうね。

「ユダは裏切り、ペテロは否む」と、こういうわけです。

●自己否定

自己否定ができるまでは、我々罪びとはキリストを否む。そういう卑劣なものです。

「己が生命をも憎まずば、わが弟子とはなれない」

とキリストは言われた。これは至難なことです。人間というものは、ご飯を食べ水を飲むことが自然であるように、自己愛というものは自然なんだ。キリストも、

「己を愛する如く隣を愛せ」

と、「己を愛する如く」と、とにかく言われた。己を愛する自愛というものは――

「どうぞ、ご自愛ください」

なんて手紙に書くが――自愛というものは根本衝動です。ところが、

「自分を憎め」

と言う。これはできないわけです。

自己完成というのは、自愛の方の角度だ。道德、修養、文化的ないろいろな意味において自己を完成していく。

「自己完成というものは悪くはないではないか、自己を憎んだら自己完成が成り立つか」

というようなわけです。そこに福音の真理の激しさがあるわけです。

ところが、福音の世界は、

「直接的な自己完成というものは本当のところに行かないで、自己否定していくものが実は本当の自己完成になる」

という、絶対矛盾の構造である。

「死して生くる」

のであって、生がただ生に展開していくのではない。死生の転換が本当の生である。自己を否定するということは死の世界だから。自己を完成するというのは生の世界です。

「己の生命を求むる者は反つてこれを失い、己を棄てる者は反つてこれを得る」

というのはそのことです。得んがために棄てるのではない。そうすると、それは幸福主義であり、一種の功利主義になる。ひとつの手段、方便になる。そんなことで本当の世界は展開しない。これがいわゆる

「文化的自由人は福音が掴めない」

ゆえなんです。いわゆる自由思想というやつは。そこで福音というものが躓きなんです。



「それは文化の否定ではないですか」

なんて。文化を直接肯定せずして、その奥に、

「その否定をして本当にその奥の世界に行ったときに、初めて真の文化が展開していく」

という世界なんですから。その構造が分からないとね。

私は「宗教と文化」でも書いたように、樹木に例えようと、地面から上に伸びていくのは文化の世界です。宗教は根つこの世界で、次元が違う、層が違う。これは下に限りなく深くなる。そのときに、幹や枝葉は反対の方向に伸びていく。空間の世界、見える世界です。根は見えざる世界です。見えざる世界は宗教の世界、福音の世界です。見ゆる世界が文化の世界。この幹になっているのが、道念、道徳です。道念の世界。

人間の営みの中に、この倫理というものが没却されたらお終いです。しかし、倫理は倫理だけでは立たない。道念や倫理の世界は、この宗教の深い世界によつてはじめて本ものとなり、これが媒介となつて、一切の人間の営みがそこに生ずる。何をしましても、この幹を通っているはずなんです。方向は反対で次元は違うが、しかし、この根によつてはじめて幹が生かされるのであつて、幹が生かそうとしているのではない。こつち（幹）は考えないでいくと、そうなる。もちろん、人間の構造は、並行して考えるという現実ももちろんあるけれども、根本的な自覚としては、何としてもこの根が第一義的なものであり、中心である。

●原因であり目的

イエスという人は、キリストという人は、自己否定をしていった方なんだから、しょうがない。

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善きものはない」

と言って、否定しておられる。

「私がいろんなことを言えると思つてゐるか。何も言えない。神さまが言えるということと言つてゐるだけの話だ。私が素晴らしい業をしていると思うか。神さまがその力をもつて業をなさしめたもうだけの話だ」

と言う。

「あなたの御意を、どうか、この私を通してやってください」

と言って、全部、自己を献供している。自己を献げてしまつてゐる。即ち、自己なんていうものを思つていたら、そんなものはみんな相対的なもので、ダメになってしまう。こんなものはダメだ、ダメだという。しかし、

「ダメだ、ダメだ」

と言って、しよげてしまうことではない。大事なものがあるから。



では、自己を否定して、その自己をどこに持つていくかということ、キリストの中へもつていくんです。外へ持つていくのではない。キリストの中へこのしょうがないやつを棄て込むんです。キリストは、ごみ溜ためみたいなものです。我々罪びとを、キリストはもの凄いごみ溜で受けとってくれる。みな浄化してしまうんだ――ちよつとおかしな話だけれども――浄化槽みたいだ。キリストはこれをみんな浄化してしまう。私たちは、

「こんなしょうがないやつはもう」

と言って、自己をキリストの中に棄てると、そこから本当に、自己完成なんていうことは考えなくても、完成に向かつていく。

もし、「自愛」という言葉を生かそうとするならば、

「主の故に、この賜りたる我というものを、主の故に本当に大事にしなくてはいかん」わけです。福音のために大事にしなくてはいかん。福音のために私たちの存在は、おろそかにしてはいかん。その意味においてなら、自愛です。

それはもつぱら

「福音のため、キリストのため」

である。「ため」というのは、何か二段構えの「ため」ではない。在ることが直ちに「ため」なんです。何かもつたいぶつたような、「キリストのために」なんていう殊勝な考えのような、そんな「ために」はひとつも力になりはしない。

「在ることが、棄てることが同時に、キリストの故に原因であり目的である。キリストはわが原因であり、わが目的である」

と。そうしたらば、J君はJ君らしく、T君はT君らしく、それで完璧なものに向かわせられていくわけです。

●贖われたる我

そのような祈りの故に、「キリストのために」という自覚において、キリストと共に「我なり」ということ。我とキリストとは一つである。

「もう私は生きていません、この私がキリストと一つである」

とパウロが言った。だから、「我はそれなり」という、「我なり」という、このキリストの言葉が今度は、私たち一人びとりの自覚となつて、

「我なり。私だぞ」

と言えるわけです。これは紙一重で霊的傲慢になるですよ、この「我なり」は。けれども、本当に贖われたる我というこの自覚です。

「私はキリストに贖われたので、キリストでなければどうにもならんやつです」

と。全く我が棄てられてキリストが生きているときに、この我という自覚が最高最深である。絶対矛盾の自己同一というのは、その意味においてだけ言える。西田先生のものを読んだ



って、分かるですよ、このキリストの光で読めば。「西田哲学は難しい」と言うけれども、難しくない。聖霊の世界というものは本当に不思議な知恵の世界です、不思議な光の世界です。

皆さん、もう本当ですよ、これは。世界中のどんな凄いものであっても、驚きませんよ。それが哲学であろうと、文学であろうと、芸術であろうと、何であろうと。このキリストの目で見えるんだから。聖霊の光でもってこれを見るんだから。どうか、それだけの自信ならざる本当の自信をいよいよ磨き上げてください。

「どんなに桁違いな世界に我々が今、導かれつつあるか」ということをね。

毎日が楽しくてしょうがないではないですか。そういう真理の世界を身につけさせられながら行くんだから。何をやったって、そうですよ。私は昨日、学校で

「野球をしよう」

というから、

「ああやるよ」

と。学生時代よりか打てるもの。2打席2安打だ。

「小池さんはよほど若い時にやったな」

なんて、そうじゃない。何年もやらなくなつて、この通りでございというわけです。ショートをやつたって、もの凄いスピードが出る。ちよつと不思議ですよ。それはエラーもちよつとやつたけれどもね（笑）。今日は身体は痛くも何ともない。

とにかく、何にしましても、

「このキリストでなければ」

という何とも言えない、それがもう祈りなんです、私はどこを歩いていても。だから、

「我はそれなり」

というこのイエスの一言が――

「イエスさまはそうだが、私はそうじゃない」

ではないですよ――あなた方一人びとがこのキリストにおいて「我はそれなり」ということ。どうか、いずこにおきましても、「我はそれなり」という証言ができなくてはいかん。

「私を否む者は、また私も天国で否むぞ」

とキリストが言っておられる。

●与えられたる新しき我

私は今度、譜面も読めないくせに、学校でコーラスの部長になった。30名くらいの部員がいる。夏に4泊5日の合宿をするという。小諸の上の方に行く。私は

「行くよ」



と言った。ちょうど日曜が挟まっているから、ひとつそこでもってコーラスの部員に福音を説いてしまおうと思う。もう機会をつかまえては証言する。嫌われようが構いやしない。今、選挙でもって大いに自己宣伝をやっているでしょ。いわゆる自己宣伝ではなくて、福音宣伝は、福音証言は、皆さん、もう至るところにその機会があるから――何もそれは、何と言いますかね、嫌らしいことは要りませんよね――けれども、そこにおいて自然な表現はなされるはずです。どうか、そのようにして、こんな大事な宝の持ち腐れをなさらないように。

私は『曠愛新書』でもって戦っていくつもりですから、どうぞ、皆さん、これを活用してください。お金のことはどうでもいいから。

「ああ、この人に何とかして読ませたい」

と思つたら、やってください。私は本当に福音のために献げたいし、皆さんも福音のために協力してください。それを私は本当にありがたくお受けしますけれども、もし、本当に福音のためでなかったら、もうお断りします。

私たちは、偽りなく福音のためにというところなら、本当に力が湧いてくるから。それは、このキリストの生命でなければ、人間はどうにもならないように出来ているんだから仕方がない。ある時は、ぐずぐずしていたら、強引に引つ張つて来たらいい。それはいわゆる折伏^{しやくふく}ということではない。けれども、それくらいの動きを――その時その時に示されるんです、動きが――その動きによつて動いてください。一定の法則なんかありません。そのところに本当の法則がはたらく。それが本当の無法の法則なんです。

キリストに深く連なつて、この「我なり」の「エゴ・エイミ」なる一言――日本語で結構です、この

「我なり」

というこの一言――この一言は本当に、私たちがキリストに在るときに、

「私だぞ。この私の中のキリストを」

という、この自覚。それが本当に自己を棄てたところの、本当の自己なんです。与えられた新しい私の告白です。

「もはや、われ生くにあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」

という、パウロのガラテヤ書2章20節が正に、それを煮詰めれば、この「我なり」の一言に帰するんです。

私は皆さんが本当に今日、これを胸のうちに、胸の肉碑に刻みこんでくださったと信じます。何をか言わん。この文字、不立文字^{ふりゆう}、活ける文字に、皆さんが即ちキリストの文字、そのものとなつたときに、もはや何をか言わん。私はいつ死んでもいい。福音はそれであれば、もうつまらないよね。



●我らを見よ

生まれつきの私たちも、ペテロさんと同じように、キリストを否んで、

「ああ、鶏が鳴いてしまった」

なんてなことになる。どうか、「鶏が鳴いてしまった」なんてなことになるように。ペテロさんは面目なかったけれども、しかし、その面目ないペテロはいくら悔いても、どうにもなりません、この悔いは。けれども、そのどうにもならんやつをとうとうイエスは捕まえた。使徒行伝3章のペテロを見ましょう。

乞食がいました。その時に、ペテロとヨハネは全く聖霊でもって、彼らは二人だけでも一つですよ。

「⁴ペテロ、ヨハネと共に目を注^とめて『我らを見よ』と言う。

「我らを見よ」と言う。「我らを見よ」とは何のことか。正に、

「我はそれなり」

と同じなんです。

「この我らの中にあるキリストを見よ」

ということですよ、この「我らを見よ」というのは。霊的傲慢ではない。全く平伏しの魂でなければ、この「我らを見よ」が言えない。

「主さま！」

と言って、この平伏しの魂が本当の力を持っている。

⁵かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、⁶ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。

イエス・キリストの名が、彼らにとつてはどれほど重いものであるか。絶対なものであるか。御名を呼べば、生きてあり給うキリストは答へ給う。

⁷すなわち右の手を執りて起こしに、足の甲と踝骨^{くるぶし}とたちどころに強くなりて、⁸躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。」（使徒3:4～8）

イザヤ書35章が現象しました。そして、後の方でペテロは何と告白しているか。12節、

「¹²ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力^{ちから}と敬虔^{けいけん}とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。

人間の信心深さなんていうものではないぞと。信仰とは、我々の信仰が何ものかではない。

「キリストが一切である」

ということ。

「私たちがお前たちをどうかしたのではないぞ」



と。

¹³ アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに

栄光をあらしめ給えり。」（使徒3・12～13）

「主さまが、この私たちを通して、その御意を為し給うただけの話だ」

と。そして、ペテロを通して、キリストの栄光が現れた。

我々はこの土の器を通して、キリストの栄光が現れ給う。このことを感謝する。感謝するのは、ただそれだけです。キリストの栄光の現れ給いしを感謝する。皆さん一人ひとりのなさることは何でありまして、そこにおいてキリストの栄光の現れたことを、私たちは感謝し讃美する。

もう、人生の在り方、目的、よつてきたるところははつきりします。

「何のために私は勉強しているのでしょうか？」

なんてなことを言う学生がいるからね。そのうちによく語つてやるよ。

なにさま、この聖霊のバプテスマによつて、魂のひっくり返りをしなくては。キリスト教に入っても、とにかく、その一線を突破しないかぎりダメです。とにかく、一人ひとり、がそれを言えるんです、

「何か知らんがもうこれは」

ということを。

私はとにかく、去年の春からここまで来まして、本当に最後に、この

「我はそれなり」

で、前半期が結ばれたことを感謝いたします。これから先、いよいよ「我はそれなり」の自覚をもつて皆さんと進んで行きたいと思っております。どんな、波風が立っても大丈夫ですよ。

もう、私は言葉がなくなつてしまった。では、お終いにしましょう。

